



書評 今田絵里香著 『「少女」の社会史』

著者	多賀 太
雑誌名	教育学研究
巻	74
号	4
ページ	581-583
発行年	2007-12-28
URL	http://hdl.handle.net/10112/2540

今田 絵里香 著
『「少女」の社会史』

多賀 太 (久留米大学)

『少年』と『少年ではないもの』の間で揺れ動く『少女』はいったいどのように生み出されたのだろうか(ii頁)。本書は、こうした著者の問題意識に基づいて、「少女」の誕生の経緯と、敗戦までのその意味内容の変遷を、丹念な史料の検討を通して明らかにした労作である。京都大学大学院人間・環境学研究科で学位を授与された博士論文が、本書のもととなっている。

まず、著者は序章において、「少女」に関する先行研究のレビューに基づき、「少女」研究の課題として次の3点を挙げる。第1に「少女」という表象に込められた意味内容がどのように変化してきたのか(=少女の歴史の変遷)を明らかにすること、第2に「少女」という表象が生み出され人々に支持された背景(=少女の社会的背景)を明らかにすること、第3に「少女」という表象がどのような形で各時代の社会規範を補強したりそれに抵抗したりしえたのか(=少女の社会的機能)を明らかにすることである。

これらの課題を達成するために著者が分析対象として措定したのが、少女雑誌である。少女雑誌こそが、「少女」というアイデンティティを創出した当の媒体であり、少女たちが現実世界において「少女」にまつわる実践をおこなうための重要な参照点であったからである。

具体的な分析が行われる本論は、子ども雑誌による「少女」の創出実践を多角的に分析した第I部(全4章)と、少女雑誌の読者による「少女」の受容過程を分析した第II部(全2章)からなる。各章における分析の概要は以下の通りである。第

1章では、「少女」アイデンティティの創出過程を明らかにするために、1877年に日本初の全国的子ども雑誌として創刊された『穎才新誌』の投稿作文の分析が行われる。第2章では、「少女」のヴィジュアル・イメージの変遷を探るために、1895年から敗戦までの少女雑誌の表紙絵と少年雑誌のそれとが比較される。第3章では、少女の行為規範の変化を明らかにするために、1908年創刊の『少女の友』掲載小説の分析が行われる。第4章では、「少女」たち自身にとっての「成功」の意味づけを探るために、20世紀初頭から敗戦までの少女雑誌の内容分析が行われる。第5章では、1930年代から敗戦までの『少女の友』の投書・投稿欄の分析を通して、「少女」アイデンティティの形成に「少女」たち自身がいかなる形で関与したのかが探求される。第6章では、1910年代から30年代にかけての「友情小説」と投稿欄の分析を通して、当時「エス」と呼ばれていた少女同士の親密な関係とその社会的機能が考察される。

終章では、これらの多角的な分析結果が総合され、序章に掲げた課題に対する回答が結論として提示される。著者によれば、その誕生から敗戦までの「少女」の意味内容の変遷は、3つの時期に分けて捉えることができる。「少年」から分離する形で「少女」が生み出された第Ⅰ期（1890年頃から1910年頃。「第Ⅰ期」の呼び方は評者による。以下同様）。「少女」が「少年」と類似して「子ども」として捉えられた第Ⅱ期（1910年頃から1937年頃）。「少女」が少国民化する第Ⅲ期（1937年頃から敗戦）である。

第Ⅰ期に「少女」という表象が創出された社会的背景としてあげられるのが、学校教育制度の変化と少年少女雑誌の創刊である。『穎才新誌』においては、それが創刊されて間もない1880年代には、女子も「少年」の中に含まれていた。しかし、中等普通教育の男女別学・別カリキュラム化にもなって、1890年代になると「少年」から分離する形で「少女」の語が使用されるようになり、1900年代には少年雑誌と少女雑誌が分離する。そうした過程で、誌上において「少女」には「少年」とは異なる意味が付与されていく。子どもの純真さを慈しむ「童心主義」のもと、「少年」は親から可愛がられ援助される存在として描かれるのに対して、「少女」は孝行をする存在として描かれる。また、学問を通じた立身出世という「教育主義」の

もと、「少年」は大人になる「準備期間」と見なされるのに対して、将来良妻賢母になることを期待される「少女」は、大人時代とは断絶した特別な時代として意味づけられる。つまり、この時期の「少女」は、女子教育を促進しつつ「少年」から女子を切り離す社会的機能を有していた。そして、この時点で近代的な「子ども」であったのは「少年」であり、「少女」はそうではなかった。

しかし、第Ⅱ期になると、次第に「少女」は「少年」と類似したものとして扱われるようになる。その社会的背景の中心をなすのが、都市新中間層の量的拡大である。1930年代になると、童心主義・教育主義の価値を志向し、良妻賢母規範の浸透した近代家族的ライフスタイルのもと、「少女」も孝行する存在ではなく、母親から見返りのない情愛を注がれる近代的な「子ども」として描かれるようになる。とはいえ、この時期には、「少女」を「子ども」に組み込みつつも、同時に「少女」を「少年」と差異化する巧妙な仕掛けが存在していた。著者がそれぞれ「芸術主義」「清純主義」と呼ぶ少女向けの行為規範である。芸術主義は、勉強や学歴取得を促す点では教育主義と共通するが、教育主義における成功が学歴を媒介として公人・企業人・軍人になることを意味していたのに対して、芸術主義における「成功」は芸術的能力を媒介として芸術家やスターになることを意味していた。後者においては、「成功」への道筋は見えにくくその可能性も前者に比べて非常に低いため、多くの少女たちは職業世界での「成功」を断念せざるをえない。清純主義も、子どもの純真さを賛美する点では童心主義に通じる部分があるが、童心主義が子どもの自我解放を称揚するのに対して、清純主義は自我抑制に価値を置き、慎みや純潔さを強調するものであった。

しかし、日本が総力戦体制に突入した第Ⅲ期には、「少女」にも「今すぐの労働・戦闘」が要求されるようになり、その意味内容は再び大きく変容する。戦場に赴く男性たちの代替的知的労働者としての役割が期待される中で、芸術主義は影を潜め、清純主義も、戦時の社会に対する即時的有用性の欠如という点からパッシングを受けることになる。そうした中で、「少女」の価値の下落を防ごうとした少女雑誌の編集者と少女たち自身の相互作用を通して、「少女」は、「総力戦」に協力する意思を持ち、かつその協力が可能な学力（学歴）を

持つ」「日本の少女」(230頁)へと変容を遂げる。その際、「少女」の価値を引き上げるために利用されたのは、はからずも近代的孩子も観に立脚した「大人と差異化する童心主義的な枠組みと、教育を至上の価値とする教育主義的な価値観であった」(230頁)。

以上の内容をふまえるならば、本書の第一義的な意義が、子どもの社会史研究にジェンダーの視点を明確に導入した点であることは明白である。つまり、著者も述べているように、「都市新中間層における『子ども』の誕生は、決してジェンダーに関係なく生じたわけではな「い」。「女子は男子とは異なる形で」、しかも男子より遅れて近代的な「子ども」になっていったのである(231頁)。

同時に本書は、日本の近代化の過程におけるジェンダーのダイナミクスを生き生きと描き出している点で、ジェンダーの歴史社会学の格好のテキストでもある。ポスト構造主義のインパクトを経た後のジェンダーの歴史研究は、単に女の歴史や過去の性差を記述するだけのものではない。その特徴の1つは、不断の差異化を通して構築されるジェンダーの意味の変遷をたどることにある(例えばJ・W・スコット『ジェンダーと歴史学』平凡社1992)。本書が明らかにした「少女」の一連の変容過程(「少年」からの分離と差異化、「少年」への近似化、「少年」の代替化)は、まさにジェンダーの意味が固定的で不変のものではなく歴史的・社会的文脈に応じて変化するものであることの優れた例証である。

ただ、強いて言うならば、結論部分が、「少年」の意味が比較的安定していたのに対して「少女」の意味が大きな変容を繰り返してきたという事実の提示だけで終わっている点については、やや物足りなさを感じる。本論で明らかにされた知見をふまえた上で、「少女」の曖昧な性格がいったいどこからくるのかという著者の当初の問題意識をもっと掘り下げて議論してみてもよかったのではないだろうか。著者は終章で、「少女」の社会的機能を各時代別に整理しているが、当初の問題意識に沿って議論を深めていったならば、より通史的な「少女」の社会的機能も見えてきたのではないかと思える。

この点に関して、本書のもつ深みと広がりをも矮小化してしまう危険性を承知しつつも、評者は「少女」を次のようなものとして理解した。「少女」の

社会的機能とは、第一義的には、新中間層男性という新たな支配者集団による支配体制を確立しそれを支えることにあったのではないか。そして、「少女」の性格が「少年」に比べて曖昧なのは、それが新中間層男性の利益にかなっていたからではないか。つまり、新中間層男性による支配を正当化するためには、旧支配者層や一般大衆に対する卓越化戦略と、女性に対する卓越化戦略の両方が成功しなければならないが、前者の戦略においては「少女」を「少年」に取り込むことが有効であり、後者の戦略においては「少女」を「少年」と差異化することが必要であるため、「少女」は「少年」と「少年でないもの」の間で引き裂かれてきたのではないか。したがって、「少女」の変容過程には、新中間層男性による支配の正当化戦略の変容が映し出されているのではないだろうか。

いずれにせよ、冒頭に掲げられた課題は本論において十分に達成されている。また、本格的な社会史研究を行った経験のない評者にとって、丹念な史料の収集と検証、そして再構成の手腕には頭の下がる思いである。本書の刊行を契機として、子ども研究、社会史研究、ジェンダー研究の発展にさらなる弾みがつくことを期待したい。(勁草書房刊 2007年2月発行 A5判 264頁 本体価格3,300円)